東京文化会館情報誌［オンミャク］

Vol.105 | 2027 WINTER

音脈 1-3

休館のお知らせ

東京文化会館は
大規模改修のため2026年
5月7日から休館しております
主催公演は都内各地にて
引き続き
お楽しみいただけます

Interview

第24回東京音楽コンクール 優勝者コンサート
山﨑夢叶　松木翔太郎　西村大地

フェスティヴァル・ランタンポレル
野平一郎
野平一郎 × オンドレイ・アダメク
ジャン＝フランソワ・エッセール

Column

フェスティヴァル・ランタンポレル
IRCAMシネマ

東京文化会館
響き合うものがたり



東京文化会館 Tokyo Bunka Kaikan
65th Anniversary

Interview

第24回 東京音楽コンクール 優勝者コンサート

山﨑夢叶（ピアノ）
松木翔太郎（ヴァイオリン）
西村大地（トランペット）

2026年8月に本選が行われた第24回東京音楽コンクールで優勝した3名に、今後の目標などを聞いた。この3名が、2027年1月11日の優勝者コンサートでオーケストラと共演する。東京文化会館から羽ばたく新進アーティストの熱演に、ぜひ期待してほしい。

取材／編集部

Information

2027年1月11日（月・祝）15:00　東京芸術劇場 コンサートホール

出演　**トランペット：西村大地**
曲目　セルゲイ・ワシレンコ：
トランペット協奏曲 ハ短調「協奏的詩曲」Op.113
ヴァイオリン：松木翔太郎
ブルッフ：ヴァイオリン協奏曲第1番 ト短調 Op.26
ピアノ：山﨑夢叶
ショパン：ピアノ協奏曲第1番 ホ短調 Op.11
指揮：高関 健　管弦楽：読売日本交響楽団　司会：金子奈緒

料金　S席2,750円　A席1,650円
25歳以下割引（全席共通）：1,100円
65歳以上割引（上限あり）：S席2,475円
障害者割引（介添え1名まで同一料金）：S席2,200円

第24回 東京音楽コンクール 審査結果

ピアノ部門

第1位	山﨑夢叶
第2位	星野悠羽、森永冬香
第3位	該当者なし
入選	間世田采伽
聴衆賞	星野悠羽

弦楽部門

第1位	松木翔太郎（ヴァイオリン）
第2位	チョ・ユンソ（チェロ）
第3位	イ・ドンヨル（チェロ）
入選	リ・スーイー（ヴァイオリン）
聴衆賞	松木翔太郎（ヴァイオリン）

金管部門

第1位	西村大地（トランペット）
第2位	平山あかり（トランペット）
第3位	多田凌吾（ホルン）
入選	緑川 誠（テューバ） 髙橋賢一郎（トランペット）
聴衆賞	平山あかり（トランペット）

※同位に複数名いる場合は演奏順です。

第25回 東京音楽コンクールのご案内

開催部門
弦楽、木管、声楽

日程・会場（予定）

応募受付
2027年4月中旬

第1次予選（非公開）
6月21日~6月30日
スクエア荏原 ひらつかホール
（品川区立荏原平塚総合区民会館）

第2次予選
8月19日~21日（各部門1日）
浜離宮朝日ホール 音楽ホール

本選
8月24・26・28日（各部門1日）
東京芸術劇場 コンサートホール

詳細は決定次第ウェブサイト等で発表します。
t-bunka.jp/tmc/

ピアノ部門第1位

山﨑夢叶（ピアノ）

YAMAZAKI Yuto


© 堀田力丸

―― 音楽を始めたきっかけは？
ある時、テレビを見ていたら指揮を振るダニエル・バレンボイムが現れ、その姿に強くあこがれを抱いて音楽をやってみたいと思いました。

―― やめたいと思ったことは？
中学生くらいの時は、音楽の一部分は好きでも音楽そのものを楽しんでいたわけではなかったので、コンクールで結果が出なかった時や、音楽に飽きていたときもありました。高校では、音楽そのものに楽しさや奥行きを感じ取り始めていたのですが、将来について考えるようになると、このまま音楽を続けていて大丈夫なのかと不安に駆られていた時もありました。

―― 本格的に音楽の道を志したのはいつ？そのきっかけは？
悩みに悩んだ末の選択ではありましたが、高校を受験する時にこの道へ進もうと決めました。

―― 今、勉強していることと、これから勉強したいことは？
ちょうど鍵盤楽器の歴史を改めて勉強する機会があり学んでいたのですが、その中で古典的な内容にはこれまで比較的多く触れてきたことに気づきました。一方で、度々出てくる性格的小品（キャラクターピース）というものに興味が湧き、レパートリーの幅を広げるためにも、次はそれについて学んでみようと思いました。

―― 尊敬する音楽家は？
様々な点において尊敬する音楽家はたくさんいらっしゃるので、決めきれないのですが、強いて言えば、やはり自分の音楽人生の始まりのきっかけであるダニエル・バレンボイムです。

―― どんな音楽家になりたいですか？
演奏をするたびに、前に進むための要素の発見・改良を常にしていき、様々な人々と音楽の共有・普及、今後の音楽の発展に貢献できるような音楽家になれるよう努力していきます。

―― 優勝者コンサートで演奏するプログラムへの想いをお聞かせください。
今回演奏させていただくショパンのピアノ協奏曲第1番ですが、自分が初めて取り組むロマン派のピアノ協奏曲作品となります。ショパン独特の旋律や民族舞踊から取り入れられたリズムなど、どう表現していこうかとワクワクしながら考えています。皆様にも楽しんで聴いていただけるよう頑張ります。

弦楽部門第1位及び聴衆賞

松木翔太郎（ヴァイオリン）

MATSUKI Shotaro


© 堀田力丸

―― 音楽を始めたきっかけは？

小さい頃から音楽が身近にあり、自然と興味を持ったことがきっかけです。その中でも、ヴァイオリンの音色に魅力を感じて、弾いてみたいと思うようになりました。続けていくうちに、音楽の奥深さや、自分で音楽を表現する楽しさを感じるようになりました。

―― 本格的に音楽の道を志したのはいつ？そのきっかけは？

コンクールなどで人前で演奏する経験を重ねていく中で、「もっと自分の音楽を深く追求したい」と思うようになりました。ただ上手に弾くことだけではなく、聴いてくださる方に自分の音楽を届け、心に残る演奏をしたいという思いが強くなり、ヴァイオリニストを将来の仕事として、本格的に目指すようになりました。

―― 今、勉強していることと、これから勉強したいことは？

ヴァイオリンの技術や表現力を磨くとともに、室内楽の勉強にも力を入れています。室内楽では、共演者の音を聴き、お互いの呼吸を感じながら一つの音楽を作っていくことを学んでいます。ソロとは違った音楽の楽しさや、音楽を人と共有する大切さを感じています。これからは、ソロと室内楽の両方を深く学び、聴いてくださる方の心に残る音楽を届けられる演奏家になりたいです。

―― どんな音楽家になりたいですか？

自分らしい音楽、自分にしか出せない音色を追求しながら、人としても自然体でいられる音楽家になりたいです。音楽に対しては真剣に向き合い、常に基礎の基礎と向き合い続けていきながら、音楽のことだけにならず、普段の生活や人とのつながりも大切にしたいと思っています。日常の感覚や、周りの人への感謝、謙虚な気持ちを忘れずに、いろいろな経験を音楽にも生かしていきたいです。

―― 優勝者コンサートで演奏するプログラムへの想いをお聞かせください。

ブルッフの音楽が持つ情熱、美しい旋律、そしてヴァイオリンならではの豊かな表現を、技巧的な華やかさだけではなく、これまで音楽と向き合う中で感じてきたことや、積み重ねてきた経験を音に託しながら表現したいと思います。そして、「自分の音楽と感性を信じること」を大切にし、今の自分だからこそ奏でられるブルッフをお届けしたいです。

金管部門第1位

西村大地（トランペット）

NISHIMURA Daichi


© 堀田力丸

―― 音楽を始めたきっかけは？

父がトランペットを吹いていたことがきっかけです。最初はトランペットよりも、幼少期から続けていたピアノに興味がありましたが、父に勧められて吹いてみたところ、とても楽しく、次第に夢中になっていきました。今では、あの時に勧めてくれた父に感謝しています。

―― やめたいと思ったことは？

一度もありません。思い通りに演奏できず、悩むこともありますが、どうすれば壁を乗り越えられるかを考え、試行錯誤する過程も楽しいです。そして、自分の力で乗り越えられた時には大きな達成感があり、それがトランペットを続ける上でのやりがいにもなっていると思います。

―― 尊敬する音楽家は？

クラシックではイエルーン・ベルワルツさんです。卓越したテクニックはもちろん、豊かな表現力も大きな魅力だと思います。聴くたびに心を動かされ、トランペットの素晴らしさを改めて感じます。演奏を聴くことが、日々の練習への刺激にもなっています。ジャズではティル・ブレナーさんです。即興演奏とは思えないほど正確で美しいメロディーラインは、聴くたびにワクワクさせられます。サブトーンを用いた繊細な表現にも魅力を感じています。

―― どんな音楽家になりたいですか？

お客様の心に残る演奏ができる音楽家になりたいです。私にとってトランペットは、自分の感情や考えを表現できる大切な存在です。言葉では伝えきれないことも、音楽なら表現できると感じています。曲に対する自分なりの思いや、作曲者が作品に込めた思いを大切にしながら、ソロだけでなく、室内楽やオーケストラなど、さまざまな場面で自分らしい演奏ができるよう、これからも学び続けていきたいです。

―― 優勝者コンサートで演奏するプログラムへの想いをお聞かせください。

今回演奏する曲は、以前から演奏したいと思っていた作品です。この作品を読売日本交響楽団の皆様と共演できることを、大変嬉しく、光栄に思っております。トランペットらしい力強い音色だけでなく、歌うような柔らかな音色や、生き生きとした快活な音色など、トランペットの様々な魅力が詰まった作品です。お客様にもこの作品の魅力を感じていただけるよう、本番に向けて精一杯準備してまいります。

Festival de l'Empereur

野平一郎プロデュース

フェスティヴァル・ランタンポレル ～時代を超える音楽～

野平一郎 インタビュー

東京文化会館は、現代と古典の音楽がクロスオーバーする新しいプロジェクト「フェスティヴァル・ランタンポレル」を立ち上げ、3年目を迎えた。2026年度は、オンドレイ・アダメク&ドヴォルザーク、レベッカ・サンダース&ラヴェルにフィーチャーしたコンサートやマスタークラス、トークセッション、そして現代音楽と無声映画のコラボレーションなど、時代を超越した多彩なプログラムを展開する。IRCAM（フランス国立音響音楽研究所）と共同で邦人若手作曲家に委嘱を行う「音楽クリエイター育成プロジェクトTokyo&Paris to the NEXT」の初演コンサートなど、プロデュースする当館音楽監督・野平一郎に聴きどころを聞いた。

取材・文／編集部

―― 今回の聴きどころを教えてください

第3回となる「フェスティヴァル・ランタンポレル」の目玉は、大きく3つあります。まず今回は2人の現代の作曲家、まだ日本ではまとまって紹介されたことのないチェコ生まれのオンドレイ・アダメク（48歳）、ロンドン生まれのレベッカ・サンダース（60歳）という異なった世代で対照的な2人の作品をご紹介します。アダメクはチェコだけではなく日本やスペインといった異なった文化圏に基づいた創作で注目を集めています。聴いて楽しくなるような工夫があちこちにされています。そして日本とも深い関係があり、それも能楽のような伝統的なものだけでなく、現代日本の様相も作品から響いてきます。今回は来日して自作の指揮、トーク、レッスンも行います。それに比べてサンダースの創作は深く戦後のドイツ音楽に根ざしています。楽器法に優れ、また息の長い重厚な作品が特徴です。ランタンポレル音楽祭では協力関係にある南仏ニームのレ・ヴォルク音楽祭のアイディアで、彼らの作品と一緒に彼らが選んだ古典の作曲家の作品も演奏します。アダメクは出自であるチェコの作曲家ドヴォルザークを、またサンダースはフランスのラヴェルを選択していて、現代と古典の室内楽やピアノ作品を組み合わせて聴いていただきます。一見すると似ていない響きがする2人の間にどのような関係があるのかを探ってみるのも、興味深いと思います。

―― 2つ目の目玉についてお聞かせください

「プレミエ・コンサート」です。東京文化会館は、文化庁の補助金により独立行政法人日本芸術文化振興会に設置された文化芸術活動基盤強化基金に採択されました。これはパリのポンピドゥー・センターの関連組織、IRCAM（フランス国立音響音楽研究所）と共同で、3年間をかけて次世代のクリエイターを育成していく試みで、いよいよその第1回の委嘱作曲家、向井響さんの登場です。日本の伝統文化と最新の音響が交錯する新しい次元の作品を、東京やパリから世界に発信していきます。また当館が独自に彼に委嘱した新作の世界初演、第2回の委嘱作曲家となる北爪裕道さんの作品など、興味深い作品が目白押しです。杉山洋一さん指揮の素晴らしい演奏家たち、そしてIRCAMの電子音響にもご注目ください。

―― 3つ目に挙げる公演は何でしょうか

IRCAMシネマ『インク壺の外へ』。アニメを含む無声映画と若手作曲家6人とのコラボレーション。そして演奏のイサオ・ナカムラさんは、数々の現代の作曲家とのコラボレーションで知られている国際的な打楽器奏者です。ここでも電子音響をIRCAMが担当します。世界中で最も最先端の技術や創造、研究が進んでいるメッカと言っても過言ではありません。先の「プレミエ・コンサート」と共に、若い作曲家が望む絶妙な電子音響の色が浮かび上がってくることが、おわかりいただけると思います。

―― 他にも盛りだくさんな内容が揃っていますね

はい。フランスからジャン＝フランソワ・エッセール、キャロル＝ロト・ドファン、オード＝ペラン・デュローを招き、彼らはフランスで大活躍中の若手ピアニスト秋山友貴さんや東京文化会館のチェンバーオーケストラのメンバーたちと共演します。素晴らしいエッセールさんお得意のラヴェルやサンダースの作品、そして孫弟子共演となる秋山さんとの連弾や二台ピアノは、ドヴォルザークのスラブ舞曲やラヴェルのラ・ヴァルスといった有名な作品とともに、サンダースの強烈な作品があり、他では聴けない大変貴重な体験となるでしょう。また、デュローさんやドファンさんを含めた東京文化会館チェンバーオーケストラのメンバーによる室内楽の夕べも必聴です。

―― 最後にお越しいただく皆様にメッセージをお願いします

ヨーロッパと日本の演奏家が一堂に介して作り上げる音楽を、古典から現代までお楽しみいただけます。今年は浜離宮朝日ホールに場所を移して繰り広げられる新しい音楽祭を、どうぞお楽しみください。



NODAIRA Ichiro Interview

©堀田力丸

※編集部注）年齢は2027年の満年齢

舞台芸術創造事業

IRCAMシネマ『インク壺の外へ』

played by イサオ・ナカムラ ～現代音楽と無声映画のコラボレーション～





"Collaboratory Ciné-concert", as part of IRCAM ManiFeste Festival Academy and Parliament of Angels, 2024, and produced by IRCAM-Centre Pompidou in collaboration with BLINDMAN

文／岡田秀則（国立映画アーカイブ主任研究員）

現代音楽 vs スラップスティックという冒険

現代音楽が無声映画に挑むこのIRCAMシネマという企画、一昨年は日本の前衛映画の先駆『狂った一頁』を、昨年はチャールズ・チャップリン初期の短篇群を取り上げ、それぞれ挑戦的な演奏を付して上映された。そして今回はアメリカのアニメーション映画史に輝くフライシャー兄弟の短篇3作品に、日本では当時「デブ君」と呼ばれたロスコー・アーバックル主演・監督の喜劇を加えた粋なプログラムである。

アメリカのアニメーション史においてディズニーほどの圧倒的な存在感はないが、製作を主とする兄マックスと、監督の弟デイヴからなるフライシャー兄弟の遺産は大きい。世界的に知られた「ベティ・ブープ」や「ポパイ」といったシリーズを除外しても、彼らには、経歴の初期にあたる1918年から10年以上にわたって生み出されたアニメーション芸術の遺産がある。それが『インク壺の外へ』シリーズだ。

シリーズの主人公は道化師のココというキャラクターである。ココは毎回、実写で現れる兄マックスの手で画用紙に描かれることで出現する。ココは紙の上からマックスと掛け合いをし、現実の世界に出てあれこれと騒動を起こすが、最後はインク壺の中に戻り、映画は終わる。この作品構造が私たちに教えてくれることは多い。当時、二次元で表現されるどのアニメーションも人間の手で描かれる点では同じだが、『インク壺の外へ』は紙上のインクの線の集合というココの物質性を前提とし、それを強調さえする。線の集まりが生き物として動くというイリュージョン、それは「アニメート＝動きを与える」という言葉の定義にも触れるものだが、この作品群はこうした原理をあえて露呈させることで成立している。実は、描く人間と描かれたキャラクターが交流したり反発したりという表現自体は兄弟以前にジェームズ・ステュアート・ブラックトン、ウィンザー・マッケイといった先達がすでに試みているが、兄弟は彼らのアイデアを活性化し、方法論に高めて映像の歴史に刻み込んだのである。

中でも今回の上映作で、本シリーズの中期にあたる『Trip to Mars（火星旅行）』（1924年）は注目に値する。マックスが自分の作った宇宙船にココを乗せて発射し、ココが火星探検をさせられるのだが、宇宙へ飛ばされる前にココがマックスの椅子の下に爆薬を仕掛けたためにマックスも宇宙へ飛ばされ、火星でココと顔を合わせる。そしてラストでは謎の大きな手が現れ、ココだけでなくマックスもインク壺に入れられる。つまりこの映画では「マックスは現実世界の住人、ココは架空の存在」という約束事さえ無化され、むしろ作り手の実験精神が前景に押し出される。その意味で本シリーズは、フライシャーのスタジオが、アニメーション映画の青春期にスラップスティックを援用しながら原理の実験を試みた冒険の記録でもある。

そして最後の『The Cook（コック）』（1918年）は真のスラップスティック・コメディ※である。ロスコー・アーバックルは、豊かな体躯ながら機敏な動きで大人気を博し、無声期のアメリカ映画を支えた役者であり、チャップリンの少し先輩格にあたる。この映画では料理人役のアーバックルと、ウェイターを演じた世界的コメディアンになる前のバスター・キートンがドタバタの騒動を繰り広げる。アーバックルが得意とした食べ物ギャグが随所に盛り込まれ、ソーセージの束や鍋、フライパンを身につけて『サロメ』のような踊りを披露するシーンもあるが、作品を貫くストーリーは希薄だ。後半は食べ物とも関係なくなり、ギャグが脈絡なく羅列されているのだが、これも当時のスラップスティックというジャンルの魅力だろう。

本作は長らく失われた映画とされていたが、1998年にノルウェーで、2002年にはオランダでより長尺のフィルムが発見された。これらを統合し、米国議会図書館が所蔵するあらすじを指針として復元版が作られたが、いまだ欠落しているシーンもある。だが時代を超えて発掘された映画が、最先鋭の音楽によって新たな命を吹き込まれることは喜ばしい。今後も音楽から映画へのさまざまな挑戦の機会が生まれるよう期待している。

※編集部注）どたばた喜劇

IRCAM Centre Pompidou

公演情報はP10参照

スペシャル対談

作曲家、東京文化会館音楽監督
野平一郎

×

作曲家、指揮者
オンドレ

日本との出会い、現在までの歩み

野平一郎（以下、野平）　私は2005年ごろからアダメクさんの情報を耳にし、多くの作品をインターネット上で視聴してきました。そこで、3回目となるフェスティヴァル・ランタンポレルに、ヨーロッパの重要な作曲家としてぜひ招待したいと思ったのです。日本との関係も含め、これまでの歩みを教えてください。

オンドレイ・アダメク（以下、アダメク）　祖母は画家、叔父は作曲家、両親も音楽好きという環境で育ち、10歳の時初めて曲を作って、作曲家になろうと思いました。15歳でプラハ音楽院に入り、並行してチェコではまだ珍しかったインド音楽、尺八を使った日本の伝統音楽、アフリカ音楽など、異文化の音楽をたくさん聴き、とても魅了されました。その後、作曲は、プラハ芸術アカデミーでマレク・コペレント教授に師事しました。

2000年、21歳の時のパリ留学は大きな転換点でした。作曲において先端的なフランスでスペクトル音楽に出会い、オーケストラやアンサンブルの書法を磨きました。インド音楽、即興演奏、指揮、電子音楽を学んだのも今の私の土台となっています。

2007年には九条山ヴィラのレジデントとして京都に5ヶ月間滞在しました。その間に神社仏閣を巡り、能や文楽を鑑賞した経験に大変深く影響を受け、滞在後の数年に渡って、日本にインスピレーションを得た作品を数曲作りました。これらのうちのいくつかは今回のフェスティヴァルで演奏されます。

一番触発されたのは日本ですが、今までに、スペインのフラメンコ、ケニアやインドでの滞在、バリのガムランなど、多くの文化から刺激を受けて作曲してきました。また、身振りと音を結びつけ、特殊奏法を直接奏者に伝えるために、指揮活動も行っています。パリの後はベルリンに10年、ローマに2年住み、現在はスペインに移住して4年目になります。



©YOKO SHIMAZAKI

今回演奏される5つの作品を解説

野平　今回は5つの作品が演奏されます。まずは《Ce qui coule du geste…（身振りから流れ出るもの…）》から。

アダメク　ヴァイオリニストのイザベル・ファウストのために書いた曲で、画家シャルロット・ギベと構想しました。初演時のライヴ・ペインティングでは、白いキャンバスに絵の具が流され、そこにイザベルの表情や手が写実的に描かれました。

その後、ヴィオラ奏者のキャロル・ロト＝ドファンがこの曲を演奏したいと言い、新バージョンを提案してくれました。そこで、ミラン・クンデラのテクストの朗読とダンスとのコラボレーションとして、フランスのニームで上演されました。今回の日本公演ではまた新しい形での世界初演となります。ヴィオラ編曲の完成版で、朗読は私が担当します。おそらくクンデラのテクスト、私自身の文章、アイスランドの詩人・ショーン（Sjón）のテクストを組み合わせ、音楽と同時、あるいは楽曲の合間に朗読します。ダンスは日本人の舞踏ダンサーを予定しています。キャロルのおかげで、毎回形が変わるオープンな作品になりました。

野平　ヴァイオリンからヴィオラに編曲したのはわかりますが、ライヴ・ペインティングが朗読+ダンスへと変貌するのは自由で興味深いです。ヴィオラでは単に移調したのですか。それとも音楽的により変化がありますか。

アダメク　今のところ移調したばかりなので変化は少ないですが、ヴィオラは大きいので、打ち合わせの中でキャロルから変更の提案があると思っています。

イ・アダメク

3回目となる『フェスティヴァル・ランタンポレル』。今回の招待作曲家の一人は、ヨーロッパで大活躍するチェコ出身のオンドレイ・アダメク。特に日本にインスピレーションを得た作品群でもよく知られる。音楽監督の野平一郎と、フェスティヴァルで演奏される作品内容を中心にじっくり語ってもらった。

取材・文／柿市 如（音楽ライター）

ダンスについては、ニームではヒップホップのダンサーでしたが、この作品ではゆっくりとしたミニマリストな動きでした。日本ではまた現場のリハーサルで構成を決めます。

ちなみに、この作品は身振りと反復が主軸ですが、バロック音楽の要素も含んでいます。小品に分かれているうちの「ファンタジア」は、ヴァイオリンだとニ短調、ヴィオラではト短調で、バロックの技巧的な楽曲のように和声構造があり、かつ、もっと超絶技巧的です。そして、バッハのアルマンドからの引用が引き伸ばされ、大きなヴィブラートで揺れ動く形で現れます。

野平　日本ではヒップホップではなく、別のダンサーになるようですからその変容を楽しみにしています。では、《Imademo（今でも）》はどうでしょうか。タイトルからして日本語と密接な関係がありますね。

アダメク　京都滞在後に声（声は録音し断片化されサンプラーの中にも取り入れられています）、サンプラー、ヴィオラのために書いた曲で、パリ在住の声楽家・秦茂子さんのために作曲しました。彼女が自分について日本語で自由に話した言葉が使われています。フランス語のテクストは、華道の作法の本からの引用です。

野平　伝統芸能だけでなく、あなたの作品には現代の日本の話し声など「日常の音」もたくさん使われていますね。

アダメク　その通りです。《今でも》や《Ça tourne ça bloque（回って止まって）》では、日本の日常の話し声をサンプリングし、リズムや拍子をつけて楽譜にしています。当時は、自然な話し声をいかに音楽にするか、その抑揚や音符を探すことに興味がありました。日本語だけでなくフランス語の声も使っています。

野平　話し声と言っても、アダメクさんにとって、自然に即興的に出てくるもの、自発性はとても重要な事項だったのではないですか。

アダメク　声がどう話され、どんな意図で発されたかというのが重要で、一度発せられた言葉はやり直せません。音質が良くなかったのでスタジオで録音し直したところ、それはもう別物になってしまいました。人工的な再現は難しいのです。《今でも》ではその自然な話し声、楽器、華道や書道の精神が交わった作品といえます。

野平　声が発せられるという原初状態を、とても良く見せてくれる興味深い作品だと思います。それでは次の作品、弦楽四重奏曲第2番《Lo que no ‘contamo’（私たちが語らなかったこと、語らないこと）》はいかがですか。

アダメク　2010年にマドリードでフラメンコに触発されて書いた曲です。フラメンコのエネルギーを弦楽四重奏曲で表したいと考えました。非常に演奏が難しい作品で、スコルダトゥーラ（変則調弦）を使い、調子はずれですし、その状態でナチュラルハーモニクスによる半音階の旋律を弾いたりするのですが、それによって、フラメンコ特有の和声的な緊張が表現されています。

第一楽章では、ギターのアタックやカンタオール（フラメンコ歌手）の声をイメージした旋律が、主に4つの楽器に分散して奏でられます。第二楽章は穏やかでメランコリック。ノスタルジックな旋律に、ナチュラルハーモニクスが多用されます。これはフラメンコの歌の微分音階（半音より細かい音程）を模しています。フラメンコの面白いところは、歌には微分音階があるのに、ギターにはないということです。つまり、その対峙には、2つの異なる性質による摩擦があるのです。

野平　器楽だけでフラメンコの歌を含んだ影響がすべて表れています。弦楽四重奏というとても古いジャンル、何世紀もに渡って作曲し続けられてきたこのジャン



©Villa Massimo, Alberto Novelli

NODAIRA Ichiro
Ondřej ADÁMEK

Special Dialogue

ルに、また新しい光が当たったように感じます。同じ弦楽器を使ったチェロとコントラバスのための《Chamber Nôise（チェンバー・ノイズ）》の背景も教えてください。

アダメク　これも日本へのオマージュです。第一楽章では、コントラバスとチェロが、能面をつけた役者と、鼓を叩き掛け声をかける囃子方を、打楽器的な音などで音楽として表します。一人が独奏で歌い、もう一人がその反響であったり、影として同じ旋律をなぞったり、エコーのようなことをしたりします。第二楽章は声明にインスピレーションを得たもので、奏者たちが般若心経を読み上げます。声明は高野山などで何度も聴き、録音しました。後にフランス語訳を読み、「形あるものに不変の実体はない（色即是空）」という深遠な思想に興味を持ちました。パーカッシブな拍子に合わせて声明が唱えられた後、京都の横断歩道の青信号で流れる曲のような五音音階の旋律が聞こえ、三味線の音や文楽の大夫の声の模倣も現れます。

野平　大変興味深いですね。なぜ《チェンバー・ノイズ》というタイトルなのでしょうか。

アダメク　実は元々《Nôise（ノイズ）》という、アンサンブルのための作品があるのです。もっと規模の大きい複雑な作品で、アンサンブル・アンテルコンタンポランのために作曲しました。《チェンバー・ノイズ》はその作品の室内楽バージョンだからです。Nôは伝統芸能の能と同じスペルです。

野平　言葉遊びにもなっていますね。

アダメク　当時、池田亮司などの日本のノイズ・ミュージックが世界的に有名だったこともあります。この作品は伝統と現代が交差する日本と京都の街を体現しているのです。

野平　最後の作品が《回って止まって》ですね。

アダメク　私の作品の中で最も頻繁に演奏されている代表作です。2007年の日本滞在中、様々な街の音を録音しました。楽曲は、大阪のコンビニ店員が繰り返していた「いらっしゃいませ、こんばんは～」という挨拶のサンプリングから始まり、その後もその声は執拗に繰り返されます。おもちゃ屋のジングルも使われており、サンプラーの音に続いて弦楽器のハーモニクスで同じメロディーが模倣されます。

そして、自分の考えを述べるフランス人男性の声の録音がコメントのように入ります。彼は、日本のコンビニ店員が入店チャイムが鳴るたびに客を見もせず、ロボットのように同じ挨拶を繰り返すことに驚いていました。彼の声も楽器で模倣されます。第二楽章では、ヴィラ九条山でお世話になった小寺雅子さんが、彼女がよく見る夢について早口の日本語で話す声が流れます。最後の楽章では、再びフランス人男性が、日本の高齢化社会やロボットの進化について力強くリズミカルに語り、やはりそのリズムが楽器で模倣されます。日常の自然な話し言葉を録音し、声を模倣する器楽と重ねて音楽にした作品です。

野平　言葉のリズムや旋律がクローズアップされた作品ですが、全体的に器楽はどのような役割を果たしていますか。

アダメク　私にとって、声は誰もが持つ楽器です。しかも各々個性的で、なおかつ音色の柔軟性も非常に高い。それを用いて器楽の音響をより豊かにしようとしたのです。私がインド音楽、日本の音楽、韓国の音楽で一つ共通して発見したのは、非常に大きい音程で揺れるヴィブラートです。これを西洋の楽器で再現させると、すぐさま、楽器の音が人間的で、声のようになるのです。私が興味を持っているのは、器楽音から最大限に人間の声の特質を引き出すこと、あるいは声の音声を器楽アンサンブルでどう表現できるかということです。

野平　演奏される作品について、ありがとうございました。いずれも声（言葉）と楽器、そして伝統と現在の日常が交差するところから音楽が生み出されていきます。アダメクさんは現在どのような新しいプロジェクトに取り組んでいらっしゃいますか。

アダメク　今、ディオティマ弦楽四重奏団のための《弦楽四重奏曲第3番》をほぼ書き終えるところで、バルセロナのサクソフォン四重奏団のための新作も進めています。また、大編成のプロジェクトも多く、2029年にチェコのオストラヴァにオープンする新しいコンサートホールの柿落とし公演のためのカンタータ、南西ドイツ放送（SWR）委嘱のカンタータ、北ドイツ放送（NDR）のためのヴィオラ協奏曲などが控えています。

20年ぶりの来日、そして日本の聴衆へのメッセージ

野平　今回20年ぶりの来日となります。日本もだいぶ変わりましたが、アダメクさんご自身もその間に変わられたのではないでしょうか。

アダメク　はい、作曲のスタイルは少し変わりました。今は作品をよりシンプルにすることを心掛けています。少ないアイデアをもっと発展、展開させることで、全体のまとまりを保つようにしています。また、調性や、よりクラシックな楽器のジェスチャーなど、古典的な要素を再発見して取り入れるようになりました。実験的なことをしようという意識が少なくなって、もっと喜びをもたらす音楽、聴く人が理解できて、何かを伝えてくる音楽を作りたいと思うようになりました。

野平　日本の聴衆にメッセージはありますか。

アダメク　20年経って、日本に再び行けるのがとてもうれしいです。世界中にたくさんの日本人音楽家の友人がいて、日本人の精神とはとても気が合います。今も日本の伝統文化の熱烈なファンで、尺八、箏、お能、文楽を愛しています。今回、東京を訪問して、コンサート、マスタークラス、トークセッションを通して、あるいは、お抹茶を飲みながらでも、みなさんに会えるのをとても楽しみにしています！

プラチナ・シリーズ

ジャン＝フランソワ・エッセール et 秋山友貴（ピアノ）～ドヴォルザーク＆サンダース＆ラヴェル～

ジャン＝フランソワ・エッセール（ピアノ）

フランスの名ピアニスト、ジャン=フランソワ・エッセール氏が来日する。楽譜を隅々まで読み込み、音が生きる「いま」に精魂を傾ける姿勢は広く知られてきた。後進の育成や音楽祭の創設にも尽力してきた重鎮だ。公演に向けて語られたことばに、氏の深い美学が宿る。2027年3月1日、浜離宮朝日ホールにてソロおよびデュオ作品を演奏、共演は創作と演奏で活動を展開する秋山友貴。

取材・文／深貝理紗子（ピアニスト・音楽評論家）

膨大なレパートリーを手掛けるエッセール氏には、今回の3人の作曲家とも興味深い繋がりがある。

「ドヴォルザーク、ラヴェル、サンダースの組み合わせは、3つの異なる時代と美学が豊かに補い合い、音楽的なパノラマを広げてゆきます。フランスではドヴォルザークの音楽が浸透するまで長い時間がかかりましたが、私は絶えず彼の作品を守ってきました。チェコの弦楽四重奏団やヨゼフ・スークのような偉大なソリストと共演する機会にも恵まれました。ラヴェルとの関わりはとても深いものです。私の師ヴラド・ペルルミュテールは、作曲者本人とともにその全ピアノ作品を学びました。私はその伝統を受け継ぎ、次世代へと伝えています。ラヴェルの生誕地サン・ジャン・ド・リュズのラヴェル・アカデミーにも30年以上携わりました。ラヴェル音楽祭を創設し、現在は教え子のベルトラン・シャマユに引き継ぎました。サンダースとは2025年に出会い、彼女の作品をご一緒しました。私にとって新たな2つの作品とともに、彼女の世界に再び巡りあえて嬉しいです。」

サンダースの音楽は休符が印象的な役割を果たしている。音楽上の沈黙について尋ねてみた。

「たしかに休符に非常に意識を向けています。“生きた”沈黙のもっとも美しい例に、当時としては革命的なモーツァルトの《幻想曲》ハ短調の序奏が挙げられます。沈黙の奥ゆきをこのうえなく生み出したのはベートーヴェンです。それは音楽のなかで主役のひとりにもなります。サンダースもそれを継承しています。沈黙とは、からっぽでもなければ、やり過ごす時間でもありません。奏者は休符に息吹を吹きこみ、聴き手に沈黙が“聴こえる”ようにしなくてはいけません。」

エッセール氏は類まれな初見力でも有名だが、あらゆる場で楽譜を読む重要性を説いてきた。その読み方からはどのような景色が見えているのだろう。

「楽譜を読むことは、人生を通して学んでゆくことです。若い頃は作品の習得や暗譜を速くできます。しかし暗譜のまま幾度も演奏するのは危険です。楽譜という物体そのものから遠ざかると、気付かないうちに作品を変形させてしまうことがあります。楽譜には基礎となる音符に加えてアーティキュレーションがあり、作品に意味を与える作曲者の指示もあります。本を読むことと比べるなら戯曲と役者の関係にも通じるものがあります。年齢を重ねゆくと作品を見るまなざしは変わります。長く関わってきた作品も定期的にテクストに立ち返る必要があります。フランスには“文字通りに受け取る”という表現があります。若い頃に起こりやすいのですが、作曲者が伝えたいことを十分な距離をおいて考えないと、意図を理解できないまま受け取ってしまいます。」

生演奏への想いも語る。

「音楽を聴き、体験する理想的な在り方は生の舞台にあります。そこでは力強さと脆さを併せもった芸術家と出会えます。生演奏は唯一無二の瞬間です。音楽は感情の沸き起こる源であるべきです。しかし感動というのは、ごく控えめに醸し出される希少なものです。その瞬間を予測することはできません。前触れもなく降り注いでくるのです。スペインではドゥエンデ（芸術に宿る魂の力）と呼びます。奏者や役者にとって、これは生涯にわたる闘いです。」

共演の秋山氏は、エッセール氏の孫弟子にあたる。

「世代の違う芸術家との出会いに長年情熱をもってきました。年長者としての立場を忘れることが大切です。若い音楽家との触れ合いから多くのことを学んできました。自身の習慣を見直す機会にもなり、絶えず変化しながら歩み続けていることを彼らにみせることもできます。秋山さんとの共演もそのような機会になるでしょう。あらゆる音楽に心を開いてくれる日本の聴衆の皆様、東京の友人たちと再び会えることを心待ちにしています。」

芸術に対峙する品格が滲む。熟練の技と経験から織りなされる音は、聴き手の機微にそっと触れる。



©Lydia Kasparian

公演情報はP11参照

Schedule

フェスティヴァル・ランタンポレル
スケジュール

Festival de l'Intempore

舞台芸術創造事業

IRCAMシネマ『インク壺の外へ』played by イサオ・ナカムラ ～現代音楽と無声映画のコラボレーション～

2月24日（水）19:00開演

コラボレーション第３弾は、ベティーブープやポパイの映画で知られるフライシャー兄弟が手がけた『インク壺の外へ』シリーズ等の4本立て。そして、演奏はジョン・ケージをはじめ数々の有名作曲家の初演を手掛けてきた世界的打楽器奏者イサオ・ナカムラが登場します。

［**上映映画**］『Out of the Inkwell』より「Bubbles」、
「Invisible Ink」、「Trip to Mars」
監督：マックス・フライシャー、デイヴ・フライシャー
『The Cook』
監督・出演：ロスコー・アーバックル
出演：バスター・キートン

［**作曲**］アンヌ・カステックス（「Bubbles」）
イ・ジヨン（「Invisible Ink」）
マリオ・モヤ・サンチェス
（「Trip to Mars」）
クロート・カート・ケス、
ナタリア・ラガンス、
ヤン・シュテヴリアク（『The Cook』）
※2024年パリ初演作品

［**出演**］パーカッション：イサオ・ナカムラ
IRCAMエレクトロニクス：
セルジュ・ルムトン
IRCAMサウンド・ディフュージョン：
シルヴァン・カダー

［**料金**］指定3,300円　25歳以下1,100円


イサオ・ナカムラ


"Collaboratory Ciné-concert", as part of IRCAM ManiFeste Festival Academy and Parliament of Angels, 2024, and produced by IRCAM-Centre Pompidou in collaboration with BLINDMAN

新進音楽家の国際キャリアアップ支援

オンドレイ・アダメクによるマスタークラス

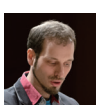
2月25日（木）14:00開始
会場：浜離宮朝日ホール 小ホール

［**講師**］オンドレイ・アダメク

［**受講生・曲目**］受講生：柴田 歩　曲目：Ðяєαм Cøяє ‿.°
編成：弦楽五重奏

受講生：麻生海督　曲目：地下劇場６（仮）
編成：トイピアノ、ホルン、コントラバス（仮）

［**料金**］聴講料（自由席）550円


オンドレイ・アダメク
©Janet Sinica


柴田 歩


麻生海督
©ranchu

音楽クリエイター育成プロジェクト成果発表

プレミエ・コンサート

2月26日（金）19:00開演

［**出演**］ヴァイオリン：成田達輝
＊第５回東京音楽コンクール弦楽部門第１位及び聴衆賞
ヴァイオリン：百留敬雄
ヴィオラ：原 裕子　＊第５回弦楽部門第２位
チェロ：森田啓介　　フルート：多久潤一朗
打楽器：高瀬真吾　　指揮：杉山洋一★
IRCAMエレクトロニクス：セルジュ・ルムトン
IRCAMサウンド・ディフュージョン：シルヴァン・カダー

［**曲目**］向井 響：人の声／機械の声
アンサンブルとエレクトロニクスのための（ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、フルート、打楽器、エレクトロニクス）★
※東京文化会館、IRCAM共同委嘱作品［日本初演］

向井 響：裸の声、感情の水面で 弦楽四重奏のための
※東京文化会館委嘱作品［世界初演］

北爪裕道：sparking 独奏フルートのための（2011）

リン・メイファン：Remembe Я
固定音源とライブエレクトロニクスのための（2025）［日本初演］

フィリップ・ユレル：弦楽四重奏曲第３番
「En Filigrane（アン・フィリグラヌ）」
弦楽四重奏とエレクトロニクスのための（2020）［日本初演］

野平一郎：謎 独奏チェロのための（2006）
※演奏順は上記と異なる場合がございます。

［**料金**］指定3,300円　25歳以下1,100円


向井響


北爪裕道


成田達輝
©Marco Borggreve


百留敬雄


原 裕子
©Dovile Sermokas


森田啓介


多久潤一朗


高瀬真吾


杉山洋一
©Ayumi Kakamu


セルジュ・ルムトン


シルヴァン・カダー

［**フェスティヴァル・セット券料金**］
一般17,325円
25歳以下4,620円
7公演全てにご入場いただけます。

フェスティヴァル・ランタンポレルについてはこちら

1回券・セット券購入者特典についてはこちら

新進音楽家の国際キャリアアップ支援

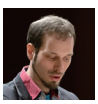
チェコの時~アダメク&ドヴォルザーク~

2月27日（土）16:00開演　※当初の発表より開演時間が変更になりました。＊15:30からプレトークがあります。

［出演］朗読：オンドレイ・アダメク
ヴィオラ：キャロル・ロト＝ドファン
舞踏：我妻恵美子
ソプラノ：駒井ゆり子　＊第1回声楽部門第2位
サンプラー：北爪裕道
弦楽四重奏
ヴァイオリン：荒井里桜　＊第15回弦楽部門第1位及び聴衆賞
ヴァイオリン：林 周雅
ヴィオラ：長田健志
チェロ：藤原秀章　＊第13回弦楽部門第2位

［曲目］オンドレイ・アダメク：Ce qui coule du geste…
（身振りから流れ出るもの…）
独奏ヴァイオリンのための7つの小品（2021）〔ヴィオラ版〕
オンドレイ・アダメク：Imademo（今でも）
ソプラノ、ヴィオラ、サンプラーのための（2009–2010）
オンドレイ・アダメク：弦楽四重奏曲第2番
「Lo que no' contamo'
（私たちが語らなかったこと、語らないこと）」（2010）
ドヴォルザーク：弦楽四重奏曲第12番 ヘ長調
Op.96, B179「アメリカ」

［料金］指定3,300円　25歳以下1,100円


オンドレイ・アダメク
©Janet Sinica


キャロル・ロト＝ドファン


我妻恵美子
©Naoko Kumagai


駒井ゆり子


北爪裕道


荒井里桜
©Takahiro Sakai


林 周雅
©Makoto Nakagawa


長田健志


藤原秀章

Talk & Lesson

フェスティヴァル・ランタンポレル トークセッション

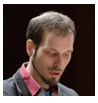
2月27日（土）19:00開演　※当初の発表より開演時間が変更になりました。

［出演］登壇：野平一郎（作曲家、東京文化会館音楽監督）
オンドレイ・アダメク（作曲家）
ゲスト：キャロル・ロト＝ドファン
（ヴィオラ、レ・ヴォルク音楽祭芸術監督）
モデレーター：沼野雄司（音楽学者）
演奏：上村文乃（チェロ）　＊第5回弦楽部門第2位
水野斗希（コントラバス）　＊第21回弦楽部門第1位

［曲目］オンドレイ・アダメク：Chamber Nôise I
（チェンバー・ノイズ I）
チェロとコントラバスのための（2010）

［料金］指定1,650円　25歳以下1,100円


野平一郎
©YOKO SHIMAZAKI


オンドレイ・アダメク
©Janet Sinica


キャロル・ロト＝ドファン


沼野雄司


上村文乃


水野斗希
©Ayane Shindo

シャイニング・シリーズVol.22

東京文化会館チェンバーオーケストラ・メンバー&レ・ヴォルク~アダメク&ドヴォルザーク、サンダース&ラヴェル~

2月28日（日）15:00開演　＊14:30からプレトークがあります。

［出演］指揮：オンドレイ・アダメク
ヴァイオリン：オード・ペラン＝デュロー、
坪井夏美　＊第12回弦楽部門第1位及び聴衆賞
ヴィオラ：キャロル・ロト＝ドファン
チェロ：上村文乃　＊第5回弦楽部門第2位
コントラバス：水野斗希　＊第21回弦楽部門第1位
ピアノ：黒岩航紀　＊第11回ピアノ部門第1位及び聴衆賞
メゾソプラノ：富岡明子　＊第1回声楽部門第3位
フルート：上野由恵　＊第2回木管部門第1位
オーボエ/イングリッシュ・ホルン：江波戸大樹
クラリネット：西川智也　＊第9回木管部門第1位
ファゴット：保崎 佑　＊第21回木管部門第1位及び聴衆賞
パーカッション：大河原 渉
サンプラー：北爪裕道

［曲目］ラヴェル：『マダガスカル島民の歌』
レベッカ・サンダース：Stirrings Still I（なおのうごめき I）
5人の奏者のための（2006）
レベッカ・サンダース：Breath（ブレス）
2つのヴァイオリンのための（2018/2023）
オンドレイ・アダメク：Ca tourne ça Bloque（回って止まって）
10楽器とサンプラーのための（2008-2011/2020）
ドヴォルザーク：弦楽セレナード ホ長調 Op.22, B52

［料金］指定3,300円　25歳以下1,100円


オンドレイ・アダメク
©Janet Sinica


オード・ペラン＝デュロー


坪井夏美


キャロル・ロト＝ドファン


上村文乃


水野斗希
©Ayane Shindo


黒岩航紀
©Makito Ishikawa


富岡明子


上野由恵


江波戸大樹


西川智也


保崎 佑


大河原 渉
©井村重人


北爪裕道

プラチナ・シリーズ

ジャン=フランソワ・エッセール et 秋山友貴（ピアノ）~ドヴォルザーク&サンダース&ラヴェル~


ジャン=フランソワ・エッセール
©Lydia Kasparian


秋山友貴

3月1日（月）19:00開演　＊18:30からプレトークがあります。

［出演］ピアノ：ジャン=フランソワ・エッセール、
秋山友貴

［曲目］ドヴォルザーク：スラヴ舞曲集［連弾］
第1集 第1番 ハ長調 Op.46-1、第2番 ホ短調 Op.46-2、
第2集 第2番 ホ短調 Op.72-2、
第1集 第8番 ト短調 Op.46-8
レベッカ・サンダース：Shadow（シャドウ）（2013）［エッセール］
レベッカ・サンダース：Choler（コラー）（2004）［2台ピアノ］
ラヴェル：ソナチネ［エッセール］
ラヴェル：亡き王女のためのパヴァーヌ［エッセール］
ラヴェル：ラ・ヴァルス［2台ピアノ］

［料金］指定4,400円　25歳以下1,100円

1/11（月・祝）15:00

関連情報P2-3

第24回東京音楽コンクール 優勝者コンサート

東京芸術劇場 コンサートホール

［出演］トランペット：西村大地 ＊第24回東京音楽コンクール金管部門第1位
ヴァイオリン：松木翔太郎 ＊弦楽部門第1位及び聴衆賞
ピアノ：山﨑夢叶 ＊ピアノ部門第1位
指揮：高関 健　管弦楽：読売日本交響楽団　司会：金子奈緒
［料金］S2,750円　A1,650円

17（日）

東京文化会館ミュージック・ワークショップ「音のお菓子屋さん」

かつしかシンフォニーヒルズ 練習室1（本館B1F）

10:00 11:30 14:30
［出演］磯野恵美、古橋果林（東京文化会館ワークショップ・リーダー）
［対象］10:00~10:45　6~18か月／11:30~12:15　19~35か月
14:30~15:15　3~4歳　［料金］550円

東京文化会館ミュージック・ワークショップ「ムジカ・ピッコラ」

かつしかシンフォニーヒルズ アイリスホール

10:30 12:00
［出演］野口綾子、松下眞子（東京文化会館ワークショップ・リーダー）
［対象］10:30~11:15　3~4歳／12:00~12:45　5歳~小学生
［料金］550円

東京文化会館ミュージック・ワークショップ「パ！パ！パ！パーカッション！」

かつしかシンフォニーヒルズ アイリスホール

15:00
［出演］櫻井音斗、島津健一（東京文化会館ワークショップ・リーダー）
［対象］小学生~大人　［料金］550円

23（土）14:30

東京文化会館ミュージック・ワークショップ「はじめましてクラシック~金管五重奏~」

台東区生涯学習センター ミレニアムホール

［出演］古橋果林（東京文化会館ワークショップ・リーダー）
テューバ：白井 翼 ＊第20回金管部門第3位及び聴衆賞、第22回第3位
トランペット：犬飼伸紀 ＊第18回金管部門入選　関根美羽
ホルン：西川優弥　トロンボーン：大泉茉弓
［対象］6か月~6歳（未就学児）　［料金］指定550円

30（土）14:00

※当初の発表より開演時間が変更になりました。

シャイニング・シリーズ Vol.21 東京文化会館チェンバーオーケストラ

サントリーホール ブルーローズ

［指揮］森内 剛
［出演］コンサートマスター／ヴァイオリン：前田妃奈★◆　依田真宣★◆
ヴァイオリン：有賀 叶◆　石亀協子★　小川恭子
鍵冨弦太郎◆　高麗愛子◆　篠原悠那★　寺内詩織★
中嶋美月◆　福田悠一郎
ヴィオラ：朴 梨恵　長谷山博史◆　森 智明◆　渡邉千春★
チェロ：井上帆乃香◆　上村文乃★◆　グレイ理沙★
コントラバス：下川 朗★　白井菜々子★
フルート：梶川真歩★　多久和怜子★
オーボエ：篠原拓也★　副田真之介★　保坂静伶奈★
クラリネット：芹澤美帆　西川智也★
ファゴット：河野 星★　鈴木一成★　山下真紀
ホルン：阿部華苗★　竹内彩華　濵地 宗★　吉田智就★
トランペット：多田将太郎★　守岡未央★
ティンパニ：塩田拓郎
★東京音楽コンクール入賞・入選者　◆サントリーホール室内楽アカデミー在籍・修了生
［曲目］ハイドン：協奏交響曲 変ロ長調 Hob.I:105
モーツァルト：交響曲第25番 ト短調 K183
メンデルスゾーン：交響曲第3番 イ短調 Op.56「スコットランド」
［料金］指定3,300円　25歳以下1,100円

フェスティヴァル・ランタンポレル

2/24（水）19:00

関連情報P5

IRCAMシネマ『インク壺の外へ』played by イサオ・ナカムラ ~現代音楽と無声映画のコラボレーション~

浜離宮朝日ホール 音楽ホール

［上映映画］
『Out of the Inkwell』より「Bubbles」、「Invisible Ink」、
「Trip to Mars」　監督：マックス・フライシャー、デイヴ・フライシャー
『The Cook』　監督・出演：ロスコー・アーバックル
出演：バスター・キートン
［作曲］アンヌ・カステックス（「Bubbles」）
イ・ジヨン（「Invisible Ink」）
マリオ・モヤ・サンチェス（「Trip to Mars」）
クロート・カート・ケス、ナタリア・ラガンス、
ヤン・シュテヴリアク（『The Cook』）
※2024年パリ初演作品
［出演］パーカッション：イサオ・ナカムラ
IRCAMエレクトロニクス：セルジュ・ルムトン
IRCAMサウンド・ディフュージョン：シルヴァン・カダー
［料金］指定3,300円　25歳以下1,100円

25（木）14:00

関連情報P6-8

オンドレイ・アダメクによるマスタークラス

浜離宮朝日ホール 小ホール

［講師］オンドレイ・アダメク
［受講生・曲目］
受講生：柴田 歩　曲目：Ðяεαм Cøяε‿。　編成：弦楽五重奏
受講生：麻生海督　曲目：地下劇場6（仮）
編成：トイピアノ、ホルン、コントラバス（仮）
［料金］聴講料（自由席）550円

26（金）19:00

音楽クリエイター育成プロジェクト成果発表 プレミエ・コンサート

浜離宮朝日ホール 音楽ホール

［出演］ヴァイオリン：成田達輝 ＊第5回弦楽部門第1位及び聴衆賞
ヴァイオリン：百留敬雄　ヴィオラ：原 裕子 ＊第5回弦楽部門第2位
チェロ：森田啓介　フルート：多久潤一朗
打楽器：高瀬真吾　指揮：杉山洋一★
IRCAMエレクトロニクス：セルジュ・ルムトン
IRCAMサウンド・ディフュージョン：シルヴァン・カダー
［曲目］向井 響：人の声／機械の声 アンサンブルとエレクトロニクスのための（ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、フルート、打楽器、エレクトロニクス）★
※東京文化会館、IRCAM共同委嘱作品［日本初演］
向井 響：裸の声、感情の水面で 弦楽四重奏のための
※東京文化会館委嘱作品［世界初演］
北爪裕道：sparking 独奏フルートのための（2011）
リン・メイファン：Remembe Я 固定音源とライブエレクトロニクスのための（2025）［日本初演］
フィリップ・ユレル：弦楽四重奏曲第3番「En Filigrane（アン・フィリグラヌ）」
弦楽四重奏とエレクトロニクスのための（2020）［日本初演］
野平一郎：謎 独奏チェロのための（2006）
※演奏順は上記と異なる場合がございます。
［料金］指定3,300円　25歳以下1,100円

◎ 掲載情報は2026年11月10日現在のものです。
◎ 都合により、公演内容が変更になる場合があります。
◎ 未就学児の入場はご遠慮ください（一部のコンサート／ワークショップを除く）
◎ 料金は税込みです。

27 土 16:00

※当初の発表より開演時間が変更になりました。

関連情報P6-8

チェコの時～アダメク&ドヴォルザーク～

浜離宮朝日ホール 音楽ホール

［出演］朗読：オンドレイ・アダメク
ヴィオラ：キャロル・ロト=ドファン
舞踏：我妻恵美子
ソプラノ：駒井ゆり子 ＊第1回声楽部門第2位
サンプラー：北爪裕道
弦楽四重奏
ヴァイオリン：荒井里桜 ＊第15回弦楽部門第1位及び聴衆賞
ヴァイオリン：林 周雅
ヴィオラ：長田健志
チェロ：藤原秀章 ＊第13回弦楽部門第2位
［曲目］オンドレイ・アダメク：Ce qui coule du geste…
（身振りから流れ出るもの…）
独奏ヴァイオリンのための7つの小品（2021）［ヴィオラ版］
オンドレイ・アダメク：Imademo（今でも）
ソプラノ、ヴィオラ、サンプラーのための（2009-2010）
オンドレイ・アダメク：弦楽四重奏曲第2番
「Lo que no' contamo'
（私たちが語らなかったこと、語らないこと）」（2010）
ドヴォルザーク：弦楽四重奏曲第12番
ヘ長調 Op.96 B179「アメリカ」
［料金］指定3,300円　25歳以下1,100円

19:00

※当初の発表より開演時間が変更になりました。

関連情報P6-8

フェスティヴァル・ランタンポレル トークセッション

浜離宮朝日ホール 音楽ホール

［出演］登壇：野平一郎（作曲家、東京文化会館音楽監督）
オンドレイ・アダメク（作曲家）
ゲスト：キャロル・ロト=ドファン
（ヴィオラ、レ・ヴォルク音楽祭芸術監督）
モデレーター：沼野雄司（音楽学者）
演奏：上村文乃（チェロ）＊第5回弦楽部門第2位
水野斗希（コントラバス）＊第21回弦楽部門第1位
［曲目］オンドレイ・アダメク：Chamber Nôise I
（チェンバー・ノイズ I）チェロとコントラバスのための（2010）
［料金］指定1,650円　25歳以下1,100円

28 日 15:00

関連情報P6-8

東京文化会館チェンバーオーケストラ・メンバー& レ・ヴォルク ～アダメク&ドヴォルザーク、サンダース&ラヴェル～

浜離宮朝日ホール 音楽ホール

［出演］指揮：オンドレイ・アダメク
ヴァイオリン：オード・ペラン=デュロー、坪井夏美
＊第12回弦楽部門第1位及び聴衆賞
ヴィオラ：キャロル・ロト=ドファン
チェロ：上村文乃 ＊第5回弦楽部門第2位
コントラバス：水野斗希 ＊第21回弦楽部門第1位
ピアノ：黒岩航紀 ＊第11回ピアノ部門第1位及び聴衆賞
メゾソプラノ：富岡明子 ＊第1回声楽部門第3位
フルート：上野由恵 ＊第2回木管部門第1位
オーボエ／イングリッシュ・ホルン：江波戸大樹
クラリネット：西川智也 ＊第9回木管部門第1位
ファゴット：保崎 佑 ＊第21回木管部門第1位及び聴衆賞
パーカッション：大河原 渉
サンプラー：北爪裕道
［曲目］ラヴェル：『マダガスカル島民の歌』
レベッカ・サンダース：Stirrings Still I（なおのうごめき I）
5人の奏者のための（2006）
レベッカ・サンダース：Breath（ブレス）
2つのヴァイオリンのための（2018/2023）
オンドレイ・アダメク：Ca tourne ça Bloque（回って止まって）
10楽器とサンプラーのための（2008-2011/2020）
ドヴォルザーク：弦楽セレナード ホ長調 Op.22 B52
［料金］指定3,300円　25歳以下1,100円

3/1 月 19:00

関連情報P9

ジャン=フランソワ・エッセール et 秋山友貴（ピアノ） ～ドヴォルザーク&サンダース&ラヴェル～

浜離宮朝日ホール 音楽ホール

［出演］ピアノ：ジャン=フランソワ・エッセール、秋山友貴
［曲目］ドヴォルザーク：スラヴ舞曲集 第1集 第1番 ハ長調 Op.46-1、第2番 ホ短調 Op.46-2、第2集 第2番 ホ短調 Op.72-2、第1集 第8番 ト短調 Op.46-8［連弾］
レベッカ・サンダース：Shadow（シャドウ）（2013）［エッセール］
レベッカ・サンダース：Choler（コラー）（2004）［2台ピアノ］
ラヴェル：ソナチネ［エッセール］
ラヴェル：亡き王女のためのパヴァーヌ［エッセール］
ラヴェル：ラ・ヴァルス［2台ピアノ］
［料金］指定4,400円　25歳以下1,100円

3/5 金 11:00 12:30

東京文化会館ミュージック・ワークショップ 「サウンドワールド～うまれるおと、ひろがるせかい～」

文京シビックホール 小ホール

［出演］坂本夏樹、宮楠菜穂（東京文化会館ワークショップ・リーダー）
［対象］11:00～11:45　6～18か月／12:30～13:15　19～35か月
［料金］550円

15:00

東京文化会館ミュージック・ワークショップ 「アンサンブル喫茶へようこそ！～本日のメニュー：ビゼー～」

文京シビックホール 小ホール

［出演］磯野恵美、桜井しおり（東京文化会館ワークショップ・リーダー）
高橋華子（メゾソプラノ）＊第8回声楽部門第2位及び聴衆賞
［対象］50歳以上（65歳以上無料招待）　［料金］550円

6 土 10:30 12:00

東京文化会館ミュージック・ワークショップ 「ムジカ・ピッコラ」

文京シビックホール 小ホール

［出演］桜井しおり、松井くるみ（東京文化会館ワークショップ・リーダー）
［対象］10:30～11:15　3～4歳／12:00～12:45　5歳～小学校低学年
［料金］550円

14:30

東京文化会館ミュージック・ワークショップ 「One Day セッション」

文京シビックホール 小ホール

［出演］薄木咲良、松下眞子、宮楠菜穂（東京文化会館ワークショップ・リーダー）
［対象］小学生～大人　［料金］550円

12 金 14:00

上野 de クラシック Vol.123　本堂竣哉（ピアノ）

＊第23回ピアノ部門第1位及び聴衆賞

旧東京音楽学校奏楽堂

［曲目］シューベルト：4つの即興曲 Op.142 D935より 第2番 変イ長調
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第12番 変イ長調 Op.26「葬送」
ピアノ・ソナタ第30番 ホ長調 Op.109
［料金］指定1,100円

14 日 11:00 14:00

東京文化会館ミュージック・ワークショップ 「はじめましてクラシック～ヴァイオリン&コントラバス～」

江東区森下文化センター 第1レクホール

［出演］澤田知世（東京文化会館ワークショップ・リーダー）
坪井夏美（ヴァイオリン）＊第12回弦楽部門第1位及び聴衆賞
白井菜々子（コントラバス）＊第13回弦楽部門第3位
中山 瞳（ピアノ）
［対象］11:00～11:45　6か月～6歳［未就学児］／
14:00～14:45　3～6歳［未就学児］
［料金］550円

東京文化会館
Tokyo Bunka Kaikan
響き合うものがたり

第3回

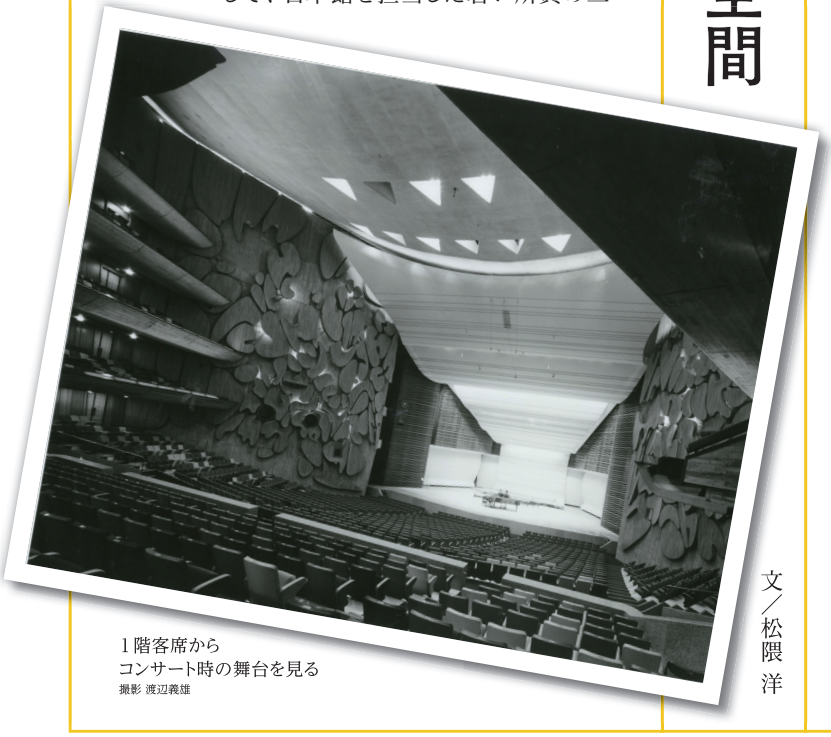
巨岩積に包まれた大ホールの祝祭空間

今でこそ、数多くのオペラ劇場やコンサート・ホールが全国各地に存在する。だが、1961年に竣工した東京文化会館の大ホールは、文字通り、オペラやバレエの上演とオーケストラの演奏が可能な舞台装置を持つ、日本で最初の本格的な劇場として誕生する。それは、世界的に見ても、きわめて早い時期のものだった。有名なベルリン・ドイツ・オペラ劇場が同じ1961年、ニューヨーク・フィルハーモニック・ホールが1962年、ベルリン・フィルハーモニー・コンサートホールが1963年、ワシントンのジョン・F・ケネディ・センターが1971年の竣工である。いいかえれば、当時は、欧米にも、見ならうことのできる先行事例はないに等しかったのだ。

そんな中で、前川國男は、どのようにして大ホールの設計を進めたのだろうか。最晩年の回想によれば、ル・コルビュジエのパリのアトリエに学んだ1928年から1930年に、前川は、オペラに魅せられ、40以上の演目を聴いたという。また、1954年に竣工し、その高い評価が東京文化会館を手がける直接のきっかけとなった神奈川県立音楽堂では、ロンドンの戦後復興の象徴として建てられたロイヤル・フェスティバルホール（1951年）をいち早く視察し、音響設計の資料を持ち帰って設計に活かすなど、地道な蓄積を重ねていた。そして、おりしも、東京文化会館の基本設計に着手した翌年の1958年春、ベルギーのブリュッセル万国博覧会で設計を手がけた日本館の竣工直後の時間を活かして、日本館を担当した若い所員の三上祐三（1931～2020年）と共に、レンタカーを借り、ドイツとオーストリアのオペラハウスを視察する2週間の縦断旅行を敢行したのである。最終目的地のウィーンでは5泊し、戦災から修復を終えたばかりの国立歌劇場を2回訪れ、設計監理を担当した建築家の説明を受け、バレエを観劇するなど、前川は多くを学んで帰国する。その一方で、大ホールを担当する所員の奥平耕造（1929～2013年）には、ドイツで出版された著名なオペラハウスの図面集を借り出させ、劇場設計に必要な基礎的知識を学ばせていた。

こうして、大ホールの設計で導き出されたのが、オペラやバレエが見やすく、しかも、客席が舞台に近く、一体となって臨場感を味わうことのできる六角形のプランと、舞台をアリーナ状に取り囲むバルコニーの客席が手前と両側の3面の壁に4層にわたって張り出す独特な断面構成の客席空間だった。また、コンサート時の良質な音の響きをつくり出すために考案されたのが、舞台上の天井と両側面を取り囲むラッパ状の音響反射板であり、天井反射板は、そのまま客席上部へと拡がり、曲面状の丸天井と一体となっている。そして、残る舞台両袖のコンクリート打放しの壁面には、彫刻家の向井良吉（1918～2010年）を起用して、ブナの無垢材を重ねた雲のような分厚い木製の音響反射板を家具職人が手づくりして設置し、骨太な華やかさを加えたのである。この音の響きの設計には、NHK技術研究所音響研究部の若い技師の永田穂（1925～2018年）が携わっていた。さらに、このように密度高く練り上げた客席の大空間を包む8／10斜めに傾いた壁は、2重のコンクリート壁となっており、その外側は、外壁と同じく、砕いた大理石を埋め込んだ城塞のような壁になっている。この重厚なコンクリート二重壁の造形を考案したのが、構造設計者の木村俊彦（1926～2009年）である。後年の回想によれば、ブリュッセル万博日本館の現場監理で三上と共にベルギーに長期滞在した木村は、現地でたまたま目にした中世の城塞の微妙な傾斜を持つ巨石積みに感激し、それをヒントにしたのだという。

東京文化会館の大ホールには、前川の指揮の下、若い担当者たちの斬新なアイデアがふんだんに盛り込まれており、そのエネルギーの総和が祝祭空間を誕生させたのである。



1階客席から
コンサート時の舞台を見る
撮影 渡辺義雄

文／松隈 洋

まつくま ひろし◉1957年兵庫県生まれ。1980年京都大学工学部建築学科卒業、前川國男建築設計事務所入所。2000年京都工芸繊維大学助教授、2008年同教授、2023年4月から神奈川大学教授、京都工芸繊維大学名誉教授。工学博士（東京大学）。専門は近代建築史、建築設計論。近著『未刊の建築 前川國男論・戦後編』（みすず書房 2024）により、第79回毎日出版文化賞〈人文・社会部門〉、第76回芸術選奨文部科学大臣賞（評論部門）、日本建築学会著作賞を受賞。



MUSIC LIBRARY

音楽資料室より

音楽資料室は、60年以上続く音楽専門の図書館です。クラシック音楽を中心とした図書、楽譜、視聴覚資料等を所蔵しており、無料で閲覧・視聴できます。[**仮事務所にて開室中**]

◀お知らせはこちらから

音楽資料室は現在、移転先にて開室中です。※上野ではありません

移転先での利用について

● **所在地**

〒135-0064　東京都江東区青海2-4-24
青海フロンティアビル 3階
（最寄り駅：ゆりかもめ「テレコムセンター」駅 直結）

● **利用方法**［**事前予約制**］

ご利用には**予約が必要です。**
予約フォームまたは電話でご予約ください。
ご利用にあたっては、【利用案内】と
予約フォーム内の案内をお読みください。

▲予約フォーム・【利用案内】はこちら

開室のご案内

● **開室時間**　木・金曜日　11:30～18:30
土曜日　11:30～17:00

※木・金曜日が祝日の場合は17:00まで
※コピー受付は閉室の1時間前まで

● **休室日**　日～水曜日・年末年始等

● **予約・お問い合わせ**

TEL: 03-5962-1099（音楽資料室直通）
［受付時間］木・金・土曜日　10:00～17:00
※休室日は、電話をお受けすることができません

移転先では現在、図書・楽譜・雑誌等の閲覧、CD・DVDの視聴ができます。

東京都交響楽団　主催公演のご案内

東京文化会館休館中は、
東京芸術劇場にて開催します。

都響

第1061回定期演奏会Aシリーズ



エリアフ・インバル　©Rikimaru Hotta

Information

2027年2月11日（木・祝）14:00開演（13:00開場）

会場　東京芸術劇場コンサートホール

出演　指揮／エリアフ・インバル

曲目　【インバル／都響 第3次マーラー・シリーズ③】
マーラー：交響曲第7番 ホ短調

料金　S席¥9,000　A席¥8,000　B席¥7,000
C席¥6,000　Ex席¥4,000　※各種割引あり

第1063回定期演奏会Aシリーズ



小泉和裕　©Rikimaru Hotta

Information

2027年3月20日（土）14:00開演（13:00開場）

会場　東京芸術劇場コンサートホール

出演　指揮／小泉和裕

曲目　モーツァルト：交響曲第36番 ハ長調 K.425《リンツ》
ブラームス：交響曲第2番 ニ長調 op.73

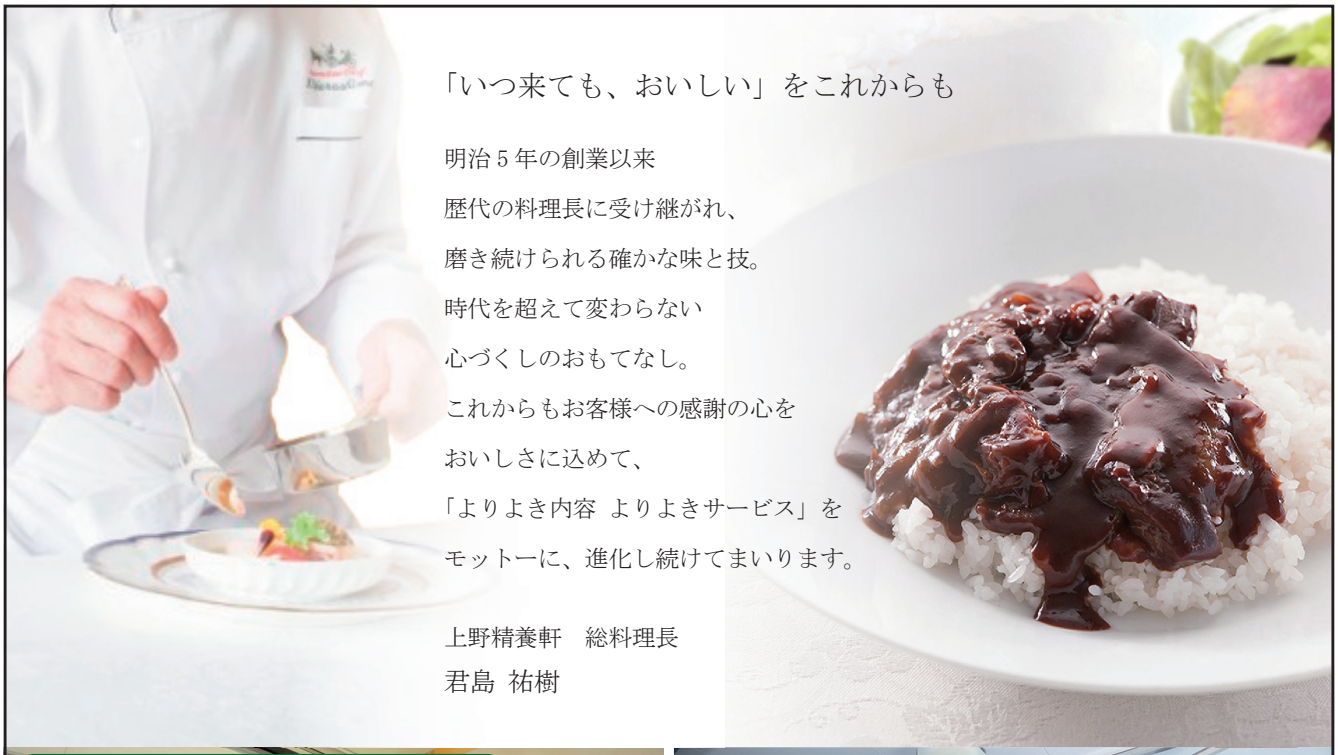
料金　S席¥7,500　A席¥6,500　B席¥5,500
C席¥4,500　Ex席¥3,200　※各種割引あり

ご予約・お問い合わせ

都響ガイド（月－金：10時～18時／土日祝休み）
0570-056-057
※主催公演開催日等は休業または営業時間が変更となります。

都響WEBチケット
https://www.tmso.or.jp
※インターネットで席を選んで購入できます。

公演中止及び出演者・曲目等が変更になる場合があります。最新の情報は都響ホームページをご確認ください。



「いつ来ても、おいしい」をこれからも

明治５年の創業以来
歴代の料理長に受け継がれ、
磨き続けられる確かな味と技。
時代を超えて変わらない
心づくしのおもてなし。
これからもお客様への感謝の心を
おいしさに込めて、
「よりよき内容 よりよきサービス」を
モットーに、進化し続けてまいります。

上野精養軒　総料理長
君島 祐樹



上野精養軒本店 グリル（フレンチ）

TEL：03(3821)2180



上野精養軒本店 レストラン（洋食）

TEL：03(3821)2183



国立科学博物館店
レストラン ムーセイオン
地球館２階

東京都台東区上野公園 7-20　TEL：03(3827)2080



東京都美術館店
レストラン ミューズ
東京都美術館２階

東京都台東区上野公園 8-36　TEL：03(5832)5551

パートさん
アルバイトさん
スタッフ募集中！

上野 精養軒

上野公園内不忍池畔
ご婚礼・ご宴会・レストラン
https://www.seiyoken.co.jp/

じぶんの好きと
住むマンション。

LIVWIZ



SOUNDPROOF ROOM

SALON HALL

PLAY

音楽と住まう。

サロンホール設置 | 全住戸防音仕様

思いを、はせる。
長谷工グループ
HASEKO

お問い合わせ
play@haseko.co.jp
貸主:長谷工総合開発

※掲載の写真はPLAY江古田にて撮影されたものです。





東京文化会館オフィシャル・パートナー

当館の主催事業は、次の企業の皆様からのご支援をいただき実施しています。

左野精養軒　長谷工グループ　朝日信用金庫　MUSISION 株式会社リブラン

旭鉱末グループ　株式会社NHKアート　株式会社國光　サントリーパブリシティサービス株式会社
JP東京特選会株式会社　新生ビルテクノ株式会社　スタインウェイ・ジャパン株式会社
日本化学産業株式会社　日本電設工業株式会社　日本みらいホールディングス株式会社
株式会社フジ・メディア・ホールディングス　株式会社前川建築設計事務所

五十音順　（2026年10月1日現在）

チームアップ！オペラ『アマールと夜の訪問者』

『アマールと夜の訪問者』は2020年に東京文化会館小ホールにて初演されたプロダクションの再演で、今回は狛江エコルマホールとたましんRISURUホール大ホールにて上演しました。このプログラムの特徴は公募により集まった子供たちが、大道具や小道具を作ったり、児童合唱やダンスをしたり、実際に参加することです。特に合唱とダンスで出演している子供たちは、夏からワークショップや稽古を重ね、東京音楽コンクールの入賞者の盛田麻央をはじめとするプロの声楽家と共演しました。出演者、スタッフ一丸となって創り上げた舞台は大盛況の中、感動の拍手とともに幕を下ろしました。今後も東京文化会館は都内各地で様々な取り組みを続けてまいります。



©飯田耕治

2026年9月20日 狛江エコルマホールの様子

ご支援のお願い

当館の主催事業をさらに充実強化するため、皆様からのご支援をお願い申し上げます。

主に個人様向け **賛助会員** **会費（年額）一口2万円**

※寄付金に対する税制上の優遇措置を受けることができます。

■ 会員期間中、下記の発行物をお届けいたします。
・東京文化会館情報誌「音脈」（年４回発行）
・東京文化会館「アニュアルレポート」（年１回年度末発行）
■ 会員期間中、主催事業の稽古見学へご案内いたします。（複数回）

詳細はこちら

法人・団体様向け **オフィシャル・パートナー**

協賛金（年額）一口30万円

これからの東京文化会館をともに創り育てていくパートナーとして
法人・団体様向けの協賛制度をご用意しております。ぜひご検討ください。

詳細はこちら



©堀田力丸



©T.Tairadate

会館からのお知らせ

東京文化会館休館に伴う
事務所移転のお知らせ

東京文化会館は、大規模改修工事のため休館（2026年５月７日～2028年度中）いたしております。
それに伴い、2026年６月より事務所を移転いたしました。ご不便をおかけいたしますが、何卒よろしくお願いいたします。

東京文化会館 事務所移転先

〒135-0064　東京都江東区青海2-4-24 青海フロンティアビル 8階
（最寄駅：ゆりかもめ「テレコムセンター」駅 直結）　電話番号：03-5579-6446

当館音楽監督の野平一郎が令和8年度の文化功労者に選出されました。

作曲家、ピアニスト、指揮者に加え、後進の育成など多岐にわたり長年活躍されてきました。
当館では、新たな企画である「フェスティヴァル・ランタンポレル」をプロデュースするなど、ご尽力いただいております。
心よりお祝い申し上げるとともに、当館での活躍を今後とも見守っていただけますと幸いです。

フェスティヴァル・ランタンポレルは2027年２月24日から３月１日に浜離宮朝日ホールで開催します。

東京文化会館情報誌［オンミャク］

音脈

Vol.105
2027
Winter

令和8年11月28日発行（年4回発行）

発行

東京文化会館（公益財団法人東京都歴史文化財団）

@tbunka_official
@TokyoBunkaKaikan
tokyobunkakaikan

t-bunka.jp

企画・編集

東京文化会館 広報担当

デザイン

株式会社ファントムグラフィックス

印刷・製本

日経印刷株式会社

チケット

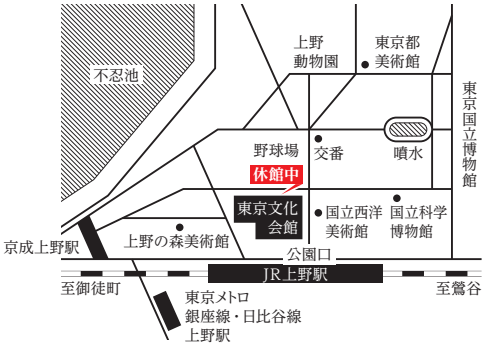
東京文化会館チケットサービス
03-5962-1788（年末年始等を除く10:00～18:00）
t-bunka.jp/tickets/

- □ 東京芸術劇場ボックスオフィス　geigeki.jp/t/
  0570-010-296（休館日を除く10:00～19:00）
- □ チケットぴあ　t.pia.jp
- □ イープラス　eplus.jp/t-bunka/
- □ ローソンチケット　l-tike.com

※公演により取扱いのないプレイガイドもございます。

休館情報

東京文化会館は令和8年5月7日から令和10年度中(予定)まで大規模改修工事のため休館中です。休館中も都内各地で主催事業を開催しています。詳細につきましては、ウェブサイトやSNS等で随時お知らせしております。



表紙解説

14ページの連載「東京文化会館響き合うものがたり」の写真は、表紙イラストの東京文化会館大ホール客席後方から当時撮影されました。